



## 足るを知り、互いの違いを理解し認め合う。 人間力を身に付けることが 海外経験

株式会社 小川工務店  
代表取締役 小川 寛氏  
(当所1号議員)

昭和60年に青年海外協力隊員としてケニアへ派遣。帰国後復職し、平成7年より現職。平成27年1月より2年間JICAの民間連携ボランティア制度を利用して社員を水のろ過装置の設置支援でフィジーに派遣中。

## 辞めずにできる 国際経験

対談

### 『国際経験』 という 『人材育成』

社員の『海外派遣』、きっかけは？

小川 私、29年前に青年海外協力隊でケニアへの派遣を経験しました。「社員にも途上国を経験してほしい」海外から日本を見ることや、途上国の生活を通して、人間力を身に着けることができるのではないかと。その思いからJICAの『民間連携ボランティア』制度を利用して社員を派遣させていただきました。

た少女がホームレスへ施しを与える姿を見たとき、物の豊かさが必ずしも心の豊かさに比例しないことを痛感させられたことを覚えています。

国際経験という人材育成の意味とは…

小川 私は「会社は楽しくなくてはならない」と思っています。経験も違えば価値観も違う社員同士が一艘の船に乗って一つの幸せに向かって行くための方向性を決めなくてはなりません。一人一人の社員が自分の能力を最大限引き出せるような環境づくり、人材づくりが私の大きな仕事です。仕事を辞めずに海外派遣ができるこの制度を取り入れたのも、その一つです。今年も海外派遣を目指して、2名の社員が入社してくれました。海外へ行き、見識

朝永 私は国内で海外の方とお仕事をさせていただいた経験から、日本人と外国人との考え方の違いなどを実感していました。今後の事業展開において、佐世保という小さな市場だけを見るのではなく、国内外を問わない市場拡大について考えるようになり、海外展開の事業可能性の検証(FS)を兼ねて、HIDAの『国際即戦力育成インターンシップ』制度の派遣を勧めました。

得られる経験とは？

小川 派遣された誰もが経験することの一つですが、まず、日本で当たり前だったルールが通用しないという現実と直面します。例えば、『明日の〇時にここで会議をしよう』と決めても、定刻になっても誰も

を広め、様々な困難、当たり前が通用しないことを経験することで、人間力を磨いて帰ってくると、これからの人生の障壁に、少し余裕をもって乗り越えていく力が身に付きます。そういったチャンスは社員に提供していきたいと思うのです。しかし、すべての社員に経験させてあげられるわけではありません。海外経験をした社員にはその情報を共有し、良い影響をほかの社員へもたらしてくれることを期待しています。

朝永 会社として上を目指していくには、社員一人一人に『仕事』や『働くこと』は何か』について関心を持たせる必要があるのではないかと思います。海外へ出ていくことで、広い視野を持つ必要性だけでなく、現場を離れ、他の人や国の働き方、海

現れない。それを気にも留めない現地の人々。時間の流れ、価値観、すべてが違うという事を経験します。その中でいかに業務を遂行していくか。その試行錯誤を繰り返す中で人は大きく成長すると思えます。

朝永 今回の派遣の以前に青年海外協力隊員として派遣した社員もいるのですが、彼は海外での経験で大きく成長しました。Plan(計画)↓Do(実行)↓Check(評価)↓Act(改善)の重要性や、違いを認め互いを理解していくこと、小さな価値観だけにとらわれていては、発展はないのだという事など、日本にいてはわからない多くのことを吸収してきたように感じます。

小川 違いを認めるという事は、日本人

外から日本を見ることが得ることも多いでしょう。佐世保に人材がいらないのであれば、作り育てなければならぬのです。人を育てなくてはいつまで経っても受け身の仕事しかできません。メーカーになっていかななくては、本当の意味での産業振興は図れないのではないのでしょうか。佐世保全体の産業の底上げのためにも人材育成は急務です。しかし、人を育てるには1〜2年で結果が出るものではありません。地域をあげて人を育てる環境を作っていく必要があるのではないのでしょうか。

小川 『私は、いつの日か普通の青年男女が、また彼らの親や雇用主も、遠い外国で、あるいは自分の国の遅れた地域において1年か2年の間、開発のために働くことを、人間形成の上で当然のこととみるよ

同士でも必要なことですよ。30人いれば30人のもの見方や考え方があって当たり前なのです。文化も風習も違う環境に身を置くことで、単純だけど、日本の生活においても必要な気付きができると思います。

朝永 家族との絆や感謝の気持ちを言葉に出し、形にすること。今では朝起きて「おはよう」の挨拶もせずに仕事へ行く人も少なくないように感じられます。物質的に豊かになりすぎた日本人が忘れかけているものに気付かされることも多いのではないのでしょうか。

小川 私も途上国を経験するまでは、「物の豊かさが幸せの基準」だと思っていました。日曜日には必ず教会へ行き、感謝の祈りをささげるケニア人。ポロポロの服を着

うになることを待望している『国連の事務総長であったミャンマー(ビルマ)のウ・タントさんのこの言葉に感銘を受けました。途上国への派遣は、支援や指導が目的と掲げられていますが、教えることよりも得ることの方が数倍多いと、経験した人は口をそろえます。

朝永 国際経験は人材育成の一つのツールです。国際経験や海外を視野に入れた事業はどこかの大都市が行う事ではなく、地方でも十分に可能性を模索できる制度があります。私はこのような制度を佐世保のより多くの方に知っていただきたい。チャンスがあればそれを生かし、チャレンジしてほしいと思います。

前職にてフランス人技術者とともに研究開発を経験。平成2年同社を設立、社員の1人を海外青年協力隊へ派遣。昨年はHIDAの国際即戦力インターンシップを利用して、トルコへ派遣

海外展開は大手企業だけのものではない  
人材育成は継続しかない。  
海外経験もその一つである。

